

松本秀一

（令和三年四月号）

頼るのは冬ざれてゆくふるさとの束の間みせる山の残照

上納の米を納めて一呼吸、日差しの戻る冬の日なりき

あう、あうと大きな息を吐きながら湯船に浸る雪の舞ふ朝

水の色深くしづめて滔々と川は流れる雪の盆地を

雪溶けて道を歩めばその先の梢の上にぼつねんと雲

居住まひを正してゆかなやがて来る明るい春を迎へるために



●作者の言葉

毎年、五月、六月は気ぜわしい月です。田植季だからです。わたしのうたは、ほとんど自然詠か生活詠です。

田んぼのうたが多いのは米づくりをしているからです。底辺の農の現場を詠みたいという気持ちがあります。人や事は時に近づき、時に

遠ざかります。やはりわたしは言葉に近づきたいのだと、ふっと思うような時があります。

わたしのうたを推して下さいました斎藤佐知子先生、とてもありがたく、うれしい限りです。

●選者の言葉

「居住まひを正して」という言葉に久しぶりに出会って驚いてしまった。なぜだろう。いつからか自分の心のありようや、生き方を素直に話すことは、恥ずかしいと思うようになっていたからだろう。

松本秀一さんは、無農薬、有機栽培の米作りに取り組んでいる。自然界への知識や深い理解がなければできない仕事である。歌作品のなかにも、自然への注意深い観察眼が生きている。

束の間の山の端の残照に託す心、雪の盆地を流れる川の深い水の色、雪解け道の行く手の、梢の上の孤独な雲、どれも日常の暮らしから発見した詩想である。

一首の調べもゆつたりしていて、どこからも誰からも自由な人のだろう。